

『落窪物語』に見られる阿漕の忠義侍女像

韓 春紅（黒龍江大学）・依岡隆児

A study on Looking at Akogi's faithful and righteous  
maid statue in the light of the "Ochikubo Monogatari"

HAN Chun Hong (HeiLongJiang University) and Ryuji YORIOKA

言語文化研究 徳島大学総合科学部

ISSN 2433-345X

第 26 巻 別刷 2018 年 12 月

Offprinted from *Journal of Language and Literature*

*The Faculty of Integrated Arts and Sciences*

*Tokushima University*

Volume XXVI, December 2018



## 『落窪物語』に見られる阿漕の忠義侍女像

韓 春紅（黒龍江大学）・依岡隆児

### A study on Looking at Akogi's faithful and righteous maid statue in the light of the "Ochikubo Monogatari"

HAN Chun Hong (HeiLongJiang University) and Ryuji YORIOKA

#### 要旨

『落窪物語』は継子虐め譚として現存最古の物語であり、平安時代の継子虐め譚で傑出した座標を占めていると言ってよい。今まで、副主人公と言える侍女阿漕についての研究はあまり多く見られない。しかし、落窪の君のために、身分不相応と言えるほど主君の窮境を救う、他の平安朝物語に見られない大活躍をした阿漕は確かに重要な存在である。しかも、この大活躍は自分の主君に忠義を尽くすことを意味するものである。

そこで、小論においては、『落窪物語』における阿漕の忠義侍女像に関して検討を試みた。まずは、阿漕の人間像を分析してみた。その次には、「後見」としての阿漕への考察を行い、阿漕の最大功績について述べ、最後には、以上の分析を踏まえて阿漕の忠義の特質を解明した。阿漕は落窪の君の一心同体の姉妹のような存在として自らの機転で落窪の君を度々助け、ピンチに陥った落窪の君を救助し、まさしく落窪の君の唯一の良き「後見」また援助者だと思われる。とりわけ、阿漕は落窪の君と道頼との結婚に助力し、最大功績を立てたのである。言わば、阿漕は落窪の君に忠義を尽くしたが、ここで阿漕の忠義の特質と言うのは、絶対的忠義と条件的忠義ということである。即ち、阿漕は絶

対的に主君である落窪の君に忠義を尽くしたのだが、何らかの目的性を持っているために、その忠義に条件を付け加え、更に事情の変化によってその忠義を別の形に変えたとも言えるのである。

## 1 はじめに

『落窪物語』は平安貴族社会において生まれた物語であり、継子虐め譚として現存最古の物語であり、平安時代の継子虐め譚で傑出した座標を占めていると言ってよい。最古の物語の『竹取物語』と最古の長編物語の『宇津保物語』及び最高の物語の『源氏物語』ほど多く研究されていなかったし、比べものにならないとはいえ、平安時代には継子虐めの物語が多く現れたことを踏まえれば、古典文学のクライマックスに達した平安文学の中の物語文学の一ジャンル——継子虐めの物語の代表作としてこそ、『落窪物語』は研究する価値があるのではないかと考えられる。

物語の女主人公落窪の君は源中納言と皇族出の女性との間の娘で、母親に早く死なれた。源中納言の北の方(継母)は、男三人と女四人の子持ちであるが、邪慳な根性の曲がった性質で、酷く落窪の君を虐待した。幸いなことに、あこぎ<sup>1</sup>という女童は何かにつけて一心一意に忠実に落窪の君を庇って奉公し、物語の男主人公道頼の乳母子である帯刀と結婚することにより、様々に苦心して悲惨な境遇に遭った落窪の君を道頼と結ばせた。然るに、二人の愛情がいよいよ深くなった時に、文使いの帯刀の不注意のために落窪の君と道頼の関係を知った継母は、驚きながら奸計をめぐらし、夫の源中納言に讒言し、落窪の君を物置小屋に閉じ籠め、自分の叔父である年寄りで好色な典薬助に犯させようとした。その危機が迫ったところを、阿漕の機転で、辛うじてその危難を免れて助け出された。その後、道頼は源中納言一家に対する一連の復讐を行ったが、継母を懲らしめた後で、源中納言に孝養を尽くし、継母や子供達にも至れり尽くせりの世話をした。

この物語については、作品の成立・作者・構成・創作方法・社会かつ時代背景・文学的地位・主題・平安時代の思想や文化や生活や風俗習慣・特色(時代、作風、人物等)・男女主人公と作中人物分析及びそのモデル論等をめぐって、『落窪物語』に関する研究が様々に行われている<sup>2</sup>が、女主人公落窪の君に仕える副主

<sup>1</sup>以下、「あこぎ」を「阿漕」と漢字表記する。

<sup>2</sup>古賀美波(2012)『『源氏物語』における『落窪物語』の影響』、服藤早苗(2006)『『落窪物語』にみる婚姻儀礼:平安中期貴族層の結婚式』、音無幸子(2005、2004)『『落窪物語』のモデル人物たち-作者を読み解く手掛かりとして-』と『落窪

人公と言える侍女阿漕についての研究は多く見られないようである。しかし、仕えた落窪の君のために、身分不相応と言えるほど主君の窮境を救い、他の平安朝物語に見られない大活躍をした阿漕は確かに重要な存在であり、欠かせない役でもある。この特色のある大活躍は何らかの意味を持っているはずである。拙論においては、阿漕の侍女像を考察することとする。

## 2 阿漕の人間像

阿漕は『落窪物語』において、わけでも巻一と巻二において、物語の発展の肝心な人物であると言えよう。まさに阿漕の大活躍を通じて、この物語はハッピーエンドに終わったのだと考えられる。それでは、阿漕はそもそも如何なる人物であったのか、また何に頼って山ほどの苦境を超克したのか、それについて考察してみたい。

後見といふは髪長くをかしげなれば<sup>3</sup> (p. 45)

ちひさくをかしげなるわかうどにて、思ふ事なげにてありく。(p. 127)

以上のように、作者はまず阿漕によい容貌を与え、小柄ながら、髪が長く、器量がよい美しげな若人として設定した。因みに、平安時代では、色白の肌、ふっくらした頬、長くしなやかな黒髪が典型的な美人の条件であるとされている。仮に結婚後の道頼と落窪の君との夫婦感情が深いと言っても、道頼は初めて落窪の君に会う前に、あの物忌の姫君のようならどうなさるかと帯刀に聞かれた時、「笠もとりあへで、袖をかつきてかへるばかり」(p. 56)と笑いつつ答えた。ここからも女性の美貌の重要さが分かる。阿漕の後姿の綺麗なのを帯刀は惚れ惚れと見送っていた<sup>4</sup>という描写通り、帯刀は阿漕の美貌に引かれたこ

---

物語』の素材と作者像 -『蜻蛉日記』との関連に着目して-、西入美保子(1995)「平安朝女性の真実—落窪物語を基にして—」、南崎晋(1992)「『落窪物語』の構成について」、栗林美幸(1988)「『落窪物語』研究—その女性像を中心に物語との関係について—」、柿本奨(1988)「落窪物語人物抄」、松田由美(1983)「『落窪物語』の男女主人公について」、志津田藤四郎(1968)「現存落窪物語成立考」、塚原鉄雄(1950)「落窪物語の人物とその成立」などが挙げられる。

<sup>3</sup>『落窪物語』本文の引用は、すべて松尾聡・寺本直彦校注、岩波書店に出版された『落窪物語 堤中納言物語』(日本古典文学大系 13)により、その頁数を示すことにする。(点は筆者注)

<sup>4</sup>原文は、「あこぎいと清げに装束きて、いときよげにけさうして、帯ゆるらかにかけてまゐるうしろで、髪たけに三尺ばかりあまりて、いとをかしげなり

とも予想されよう。

ところが、愚かな人はたとえ美貌であるとしても、残忍な狡猾な継母に直面すれば、継母の迫害から落窪の君を守りかねると考えられる。それでは、阿漕にどんな性格を付与されたのか。

されたる女ぞ (p. 43)

「…あこぎ、おとなになりね。いと心およずけためり」 (p. 124)

物のくさはひはならびたれば、少將の君、便なしとのみ聞きしに、いと心にくゝおぼす。女君もいかなるらんとおぼす。 (p. 78)

衛門取りくばりしおきつるにも、目やすく見ゆ。 (p. 139)

「さて腹だてなん。猶なごめさせおはしませ。頼む方のあらばこそ、今宵はたてこめて、明日はその人にいはんとも思ひ侍らめ。少將の君歎き侘び給へども、いかでかは。只今あたりにだにおはしよらむことかたくなむ。…」 (p. 113)

引用の部分から分かったように、阿漕の性格は、機転が利き、機知に富み、心が老成している上に、才能があり、腕があり、力強く、行動力がある。しかも、阿漕は出来事を客観的に理知的に判断し得る利発さと冷静さを持っている女性でもある。このような性格を備えていたからこそ、絶えず種々な苦境から落窪の君を助けることができたと言って過言ではない。

にもかかわらず、単なる童の侍女という身分で敢えて源中納言邸の実権を握った北の方と抗争できるのか、誰でも疑問を持っているだろう。「をばの殿ばら宮づかへしけるが、今は和泉守の妻にてあたりけるがり文遣る。」 (p. 65) とあるように、阿漕の縁者にはかつて身分の高い人々に宮仕え、今和泉守の妻となった叔母がいる。それに、露という童を召し使っている。また「これや惟成が妻の手、いたうこそ書きけれ。よき折にこそは有なれ。行きてたばかれ」 (p. 53) と書いてあり、つまり、阿漕は筆跡が極めて上手だと道頼から褒められた。更に、阿漕は平安貴族社会を形成する底辺の人々に属している<sup>5</sup>。以上の内容を総合してみれば、阿漕は一般庶民と異なり、決して身分の極めて低い人ではないと断定できよう。実を言うと、「高貴な出自の侍女は、用いる側にとっては

と、帯刀も見送る。」 (p67) である。

<sup>5</sup> 三谷邦明「解説」『落窪物語 堤中納言物語』（日本古典文学全集）三谷栄一・稲賀敬二校注／訳、小学館、1986、p20

様々な恩恵を受けられる存在である。また、侍女として出仕して、さしあたって安定した生活を手にすることは、凋落した生活から救済される側面もある。」<sup>6</sup>と指摘された如く、阿漕は必ずしも高貴な出自とは限らないというものの、落窪の君にとっては、様々な恩恵を受けられる存在であるに相違ない。

### 3 「後見」としての阿漕

一般論としては、実の母がいるならその「後見」が最良、乳母の「後見」なら次善、その他の侍女はそれに次ぐものという認識が、平安文学における子の養育の際の「後見」に対する期待値といえるだろう<sup>7</sup>と古田正幸氏によって述べられたが、『落窪物語』の場合はどのような状況であろうか。

おとゞも、ちごよりうたくや思しつかず成(り)にけん、まして北の方の御まゝにて、はかなき事おほかりけり。はか／＼しき人もなく、乳母もなかりけり。たゞ、おやのおはしける時より使ひつけたるわらはの、されたる女ぞ、後見とつけて使ひ給ひける。(p. 43)

というふうに、母君が生きていた時から召し使っている気の利いた阿漕は、実父に可愛がられずまた実母も乳母もいない落窪の君のたった一人の「後見」として、初登場した。というわけで、単なる「後見」から見れば、落窪の君は継子の身分でありながらも有力な「後見」を持っておらず、継母である北の方の思いのままに酷い仕打ちを受ける始末となり、如何にも凋落の運命で、可憐だと言わざるを得ない。

血縁関係の有無と、侍女として期待される「後見」の優秀さは、直接的な関係がない<sup>8</sup>という見解を踏まえて、「後見」としての阿漕が適任か否か、一言で言い切れず、物語の事実によってしか判断できない。そこで、阿漕は継母である北の方による酷い仕打ちから落窪の君を守るかどうかを、検討したい。

#### 3.1 阿漕と落窪の君との関係

先に究明したいのは、阿漕と落窪の君との関係である。それに関しては、落

<sup>6</sup> 吉川真司「平安時代における女房の存在形態」『律令官僚制の研究』, 塙書房, 1998, pp445-463

<sup>7</sup> 古田正幸「平安文学における侍女の『後見』」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』第14号, 2012, pp172-160

<sup>8</sup> 同書

窪の姫君と阿漕とが理想的な主従一体型の関係だと指摘された<sup>9</sup>。阿漕は落窪の君の「後見」でありつつも、表面的に言えば、依然として落窪の君の召し使われている童であり、つまり落窪の君と主従関係であるが、実情はそれ以上の関係もあるらしい。

「わが君に仕うまつらむと思ひてこそ、親しき人の迎ふるにもまからざりつれ。何のよしにか、こと君どりはし奉らん」(p. 45)

「何か。同じ所に住まん限りは、同じ事とも見てん。衣などの見苦しかりつるに、中々うれしとなん見る」(p. 45)

あこぎをだにいかであはんと思へども、見えず。(p. 100)

以上の会話から、物語の最初に落窪の君の唯一の良き援助者として登場させた阿漕の忠義並びに落窪の君の優しさと労わりの深さが読み取れる一方、落窪の君と阿漕との微動だにしない信頼関係また阿漕が落窪の君の心中の唯一の頼りであることも分かった。なお、「後見」の語で表わされる人間関係が、元々は「私」的な関係、「家族」的な関係に基づいていると見ることができると古田氏が述べた<sup>10</sup>。従って、二人は単に主従関係であるのみならず、「あはれに思ひかはして、片時離れず。」(p. 43)という一心同体の姉妹のような関係にもあるのではないかと思われる。

### 3.2 落窪の君を助ける阿漕

『落窪物語』は継子虐めの物語であった以上、継母が継子を虐める設定があるのは当たり前の事である。それ故に、源中納言の北の方(継母)は落窪の君(継子)を虐めたのである。その虐めは次のようなものである。

- (1) 落ち窪んだ部屋に住ませ、更に落窪の君を納屋に幽閉したこと。
- (2) 「落窪の君」という蔑称を付けたこと。
- (3) 無理矢理に裁縫を強制したこと。
- (4) 唯一の召使を奪い取ったこと。
- (5) 供に石山寺へ参詣に行かせなかったこと。
- (6) 衣装を取り揃えて着せなかったこと。
- (7) 調度品を略奪したこと。

<sup>9</sup> 佐久間洋子「源氏物語の侍女の役割と変貌」『日本文学』88 巻, 1997, pp33-48

<sup>10</sup> 古田, 前掲書, pp172-160



(8)結婚を許さなかったこと。

(9)父親(源中納言)への讒言で落窪の君を陥れたこと。

(10)落窪の君を老醜な典薬助に許嫁にしたこと。

(9)について、特に言う必要があると考えている。母親に早く死なれた落窪の君にとって、父親は一番親しい頼りになる人のはずであろう。それでは、父親は一体どのような人だろうか。「老いほけて、物のおぼえぬ儘にの給へば」(p. 98)と描かれたように、毫碌し、物が知覚されず、事の理非がわきまえられない人であった。よって、「…おとゞも北(の)方にとりこめられて…」(p. 47)と言った如く、常に父親が全く無力で、継母の言うままに行動するのが特徴だと考えられている。それにせよ、所詮自分の娘だから、父親は「みなりいとあし。あはれとは見奉れど、まづやんごとなき子どもの事をする程に、え心しらぬなり。よかるべき事あらば、心ともし給へ。かくてのみいまするがいとほしや」(p. 49)と言い、落窪の君に関心を示したのである。だが、継母が絶えず源中納言に落窪の君の悪口を言っていた故に、父親の口からは結局「夜の中に縫ひ出さずは、子とも見えじ」(p. 88)というような酷い言葉も出た。殊更、落窪の君と道頼との関係を察した継母が讒言した時、それを信じ込んだ父親は「いとよかなり。只今追ひもてゆきて、此(の)北の部屋にこめて、物なくれそ。しをり殺してよ」(p. 98)と無茶なことを言ったのである。「おとゞも、ちごよりうたくや思しつかず成(り)にけん、まして北の方の御まゝにて、はかなき事おほかりけり。」(p. 43)、また、「継母のにくむは例の事に人も語るたびありて聞く。おとゞの御心さへかゝるを、いといみじう思ふ。」(p. 102)ともあるように、継母の言動が理不尽ながらも一応理解できるものの、実父の冷遇や酷い仕打ちまでも受け、世間一般の継子よりも酷く扱われたと考えなくてはならない。そのため、落窪の君の受けた虐めは最も残酷であったと言えよう。

このような虐めに対し、落窪の君の唯一の「後見」としての阿漕は如何にして対応したのか。詳しく説明すれば、次の通りである。

まずは、阿漕は環境のよい部屋を選ばずに、落窪の君の部屋のつづきである庇の間の二間を自分の部屋としてもらい、しかも主君である落窪の君の部屋より一段床の低い一間を寝室に設えた。落窪の君の部屋に近いので、世話をするのに便利であるという事実は無論のことであり、住居面の苦を共にする考え方もあったと考えても間違いない。その次には、北の方の命令で三の君の召使になったのだが、相変わらず落窪の君の世話をした。そうすると、形式的には三の君の侍女であった半面、実際には依然として落窪の君の侍女であるように考えられる。更に、寂しい落窪の君の供になるように、姫でさえ取り残されるの

を恥とする楽しい石山寺行きの参詣を放棄した。また、よく夫帯刀に落窪の君の素晴らしさと不幸さ及び北の方の残虐性を訴えたし、帯刀と協力して、道頼と落窪の君の結婚を促して成就させた。そういうふうには、北の方からの結婚禁止を打破した。それと同時に、落窪の君の幸福のために、色々と苦心して衣類や調度品等を全部準備しておいた。最後に、阿漕は、落窪の君がその人生中の最大の危機——典葉助の許嫁にさせられたこと——に迫っていた時に、敢えて北の方と戦って自らの機転により主君を助けた。

従って、阿漕は確かに落窪の君の唯一の良き「後見」また援助者であり、落窪の君の一心同体の侍女でもある。

#### 4 最大功績を立てた忠義なる阿漕

前述の如く、美貌なる阿漕は優れた性格に恵まれており、落窪の君の「後見」また援助者として一心同体の姉妹のような存在として登場した。しかも、落窪の君が源中納言邸で惨めな処遇を受けていた時に、まめまめしく甲斐甲斐しく立働き、自分の腕を振るって色々と苦心したり工面したりし、身分不相応と言えるほど落窪の君を庇護し、なにかんづく最後の救出に利発的に冷靜的に才覚を働かせた。よって、落窪の君を絶えずに助けたことで、落窪の君の支えともなっていると見えよう。それこそ、阿漕が落窪の君に忠義を尽くす現われと考えられる。

##### 4.1 「忠義」とは何か

まず、『新編大言海』<sup>11</sup>によると、「眞心モテ君ニ仕フル節義。忠節。唐書、馬周傳『不幸、早失<sub>レ</sub>父母<sub>レ</sub>、犬馬之養、已無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>施、可<sub>レ</sub>爲者惟忠義而已』謝靈運詩『本自江海人、忠義感<sub>レ</sub>君子』」とのことである。また、『日本国語大辞典』<sup>12</sup>では、「私欲をさしはさまないで、まごころを尽くして主君や国家に仕えること。忠節。\*続日本紀—延暦二年(783)七月乙巳『尽<sub>レ</sub>忠義<sub>レ</sub>而事<sub>レ</sub>君』\*性靈集—七(835頃)田少弐爲孝子設齋願文『春宮瓊枝、宰輔百工、共竭<sub>レ</sub>忠義<sub>レ</sub>、福履綏<sub>レ</sub>之』(以下略)」と解釈されている。

本論文における「忠義」とはいうまでもなく、「忠節」の意味で、真心を尽くして主君に仕えることである。というわけで、阿漕は主君である落窪の君に忠義を尽くしたのである。

<sup>11</sup> 大槻文彦『新編大言海』, 富山房, 1987, p1326

<sup>12</sup> 『日本国語大辞典 第二版 第八巻』, 小学館, 2001, p1449

#### 4.2 阿漕の最大功績

単刀直入に言えば、阿漕の最大功績は落窪の君と道頼との結婚に助力することである。一夫多妻制の平安時代では、落窪の君と道頼との一夫一妻という婚姻形態が女性たちの憧れであり、何よりも求め難い理想的な結婚生活でもある。自照文学の嚆矢とされている藤原道綱母に書き綴られた『蜻蛉日記』を読んでも見たら、読者はそれが直ちに分かったろう。

##### 4.2.1 平安貴族の結婚

貴族とは、三位以上の「貴」と、四、五位者の「通貴」の総称であるから<sup>13</sup>、源中納言の娘として生まれ育った落窪の君が平安貴族階層に属しているのは当然のことである。よって、最初には平安貴族の結婚についていささか触れてみることにした。平安時代の結婚は大体婿入り婚(招婿婚・妻問婚とも)であり、即ち夫が妻の家に通うという通い婚である。ここでは、特に言う必要があることは、結婚用のすべてが妻の家で用意されることである。

貴族の女性は、人前に姿を見せることはほとんどなく、男性たちは、もっぱら噂を聞いて、部屋の中にいる女性を垣根の外からこっそり盗み見たりして、見定めた<sup>14</sup>。それはいわゆる出会い(垣間見)ということである。すると、継母に結婚さえ許されない落窪の君なら、その噂は世に広げられるはずがないと察することができる。また、出会いの後、男性たちは「意中の女性には、女性側の侍女などを通じて文(手紙)を送った」<sup>15</sup>という仕方では交際を始めようとしている。そうすると、侍女である阿漕の役割が最も重要となるのは明らかになってくる。

##### 4.2.2 落窪の君と道頼との結婚に助力する阿漕

前述の分析の続きとしては、阿漕は如何にして自分の役割を果たしたのかを考察する。

確かに、唯一の援助者としての阿漕が心から落窪の君を思って庇ったのである。その上、自分の主君が幸福になるのは、「いかで思ふやうならん人にぬすませ奉らん」(p. 46)と言う如き、理想的な人の妻になるよりほかないと早めに認識してきたように思われる。そのため、阿漕は夫帯刀に道頼の誠意を確認しながら、帯刀の助力を通じて、道頼と落窪の君との結婚を促して成就させた。

<sup>13</sup> 村井康彦「平安貴族とは」『平安貴族の生活』, 有精堂, 1985, p14

<sup>14</sup> 国語教育プロジェクト編著『新国語便覧 増補三訂版』, 文英堂, 2008, p31

<sup>15</sup> 同書

言い換えれば、落窪の君の人生を正しい目的地に向かって進ませる役割を立派に果たした人は間違いなく阿漕だと言えよう。

さて、結婚に関しては、結果からいうとハッピーエンドになったけれども、過程からいうと確実にありとあらゆる辛苦を嘗めたと言わなくてはならない。親の許しが無いのは一因であろうが、やはり阿漕無しには落窪の君が結婚できないと言っても言い過ぎではない。それと共に、帯刀の手柄も中々無視できないに違いない。次にその過程を見てみよう。

第一は、文での交流の仲立ちは阿漕である。落窪の君は継母を恐れた故に、結婚する気がなかったそうである。その時に、阿漕は道頼との結婚に踏み切れずにいる落窪の君を激励しただけではなく、代わりに文の返事もした。「侍女による代筆の返事、さらには本人直筆の返事が来るようになる」<sup>16</sup>、そうして初めて男性は「女の部屋を訪ねる許しを得るようになる」。すると、男女二人の交際が成立でき、更に結婚により一歩近付いてくる。

第二は、衣装や調度品や食事等の支度をした人は阿漕である。物語には、結婚の初日、落窪の君は衣装の粗末さにより恥ずかしくて死んでしまいたいというような表現が何箇所もあった。そのままでは、道頼との結婚はうまくいくわけがない。それなのに、結婚の二日目、阿漕は二度ばかり着た極綺麗な宿直用の自分の袴を落窪の君に着せ、ほんの少し持っていた薫物でその袴を焚き染めた。それに、調度品を整備する他、朝食まで用意し、道頼よりの関心を懸命に繋ぎ止めた。それにより、落窪の君は打ち解けて道頼とうまく付き合い始めた。

第三は、結婚三日目の夜の祝宴の準備をした人は阿漕である。「今宵はたゞをかしきさまにて餅をまゐらんと思ひて」(p. 70)という阿漕の考えに加えて、四の君の新婚第三夜の盛大な祝宴からも結婚三日目の夜の祝宴の重要性が推測できよう。露頭といった公的儀式により結婚が軌道に乗ったと思われるからである。従って、阿漕は自分の叔母に頼んで三日目の夜の祝宴のための調度品や餅<sup>17</sup>等を拵えておいた。なお、三日目の「雨夜訪問」は今も昔もない古今

<sup>16</sup> 同書

<sup>17</sup> 婚姻の日から三夜目に当たる〈露頭〉の夜、帳中の新郎新婦に祝の餅を供進する儀がある。この餅を〈みかよのもちひ〉〈みかのよのもちひ〉〈みかのもちひ〉〈みかのもち〉〈三日餅〉〈みよのもちひ〉〈三夜餅〉といい、また〈餠餅〉ともいう。この儀は幾久しく幸多かれと二人の前途を祝い、夫婦の和合を祈って、福德ある高齢者が調進の任に当たる。宮廷をはじめ貴族社会において広く行われた。(中村義雄『王朝の風俗と文学』, 塙書房, 1986, pp164-165)

無類だと帯刀の口<sup>18</sup>を借りて読者に告げた。結婚三日目の夜の祝宴の成功で、道頼と落窪の君との婚姻は更にうまくいったようである。その成功と言うと、阿漕はもとより、帯刀の協力も高く評価しなければならない。

第四は、幽閉された落窪の君を助けた人は阿漕である。簡単に言えば、継母の讒言で父親に幽閉された落窪の君は、阿漕の助け無しに、典薬助の性的侵犯も、更に老醜な典薬助に許嫁にするのも逃れることができないし、まして道頼と幸せな生活を過ごすはずもない。

ともかく、阿漕という仲人の助力で、落窪の君は作中人物にも非常に認められた道頼という夫を持つことができた。換言すれば、落窪の君の運命を打開したのは、まめまめしく健気に奉仕した忠義な阿漕であると考えられる。それもまた阿漕は落窪の君に忠義を尽くす現われだと言うほかない。

因みに、落窪の君は女性としての世の中の最大の幸福を得た。即ち、自分しか寵愛してくれない理想的な人——身分の高い太政大臣<sup>19</sup>の北の方となり、男の子供たちもそれぞれ右大臣と左大臣になり、一女を后にすることもできた。

要するに、援助者として継母からの虐待を受けた落窪の君を助けた阿漕の姿、且つ仲人として落窪の君と道頼との結婚に助力した阿漕の姿は、何より落窪の君に忠義を尽くしたことをより明確に証明したのではないかと思われる。

## 5 『落窪物語』に現れた阿漕の忠義の特質

前に述べてきたように、阿漕が主君——落窪の君に忠義を尽くしたことは既に異論がないことである。それでは、阿漕の忠義の特質は何か、それを解明してみよう。

### 5.1 阿漕の絶対的忠義

まず初めに、古典文学作品に現れた忠義の話を簡単に紹介しよう。

「てんの使といはんものは、命を捨てゝも、をのが君の仰ごとをば叶へん  
とこそ思ふべけれ。」

「さらばいかゞはせむ。難き事なりとも、仰ごとに従ひて求めにまからむ」

---

<sup>18</sup>原文は、「かばかりの御心ざしは、今も昔もあらじ。類なしとは思ひ聞え給ふや」(p76)である。

<sup>19</sup>道頼を指す。物語の進行に従って道頼の官位は少将・中将・中納言兼衛門督・大納言・大将・左大臣・太政大臣と昇進してゆくが、便宜上、本稿では道頼で統一する。

「なむちらが君の使と名を流しつ。君の仰ごとをば、いかゞ(は)背くべき」

これは最古物語の『竹取物語』<sup>20</sup>での大伴みゆき大納言とその従者たちの会話である。『竹取物語』は現存する日本最古の物語であり、物語文学の元祖とも呼ばれ、和文による初めての伝奇的な作り物語で、後続の作品に及ぼした影響も大きいと言われる。従って、成立年代が凡そ十世紀の終わり頃だと推察された作り物語の系統を引き継いだ『落窪物語』も『竹取物語』の影響を受けたと考えても差し支えなかろう。この会話から、命を捨てても自分の主君の命令に従うべきだということが読み取れる。それは従者の忠義ばかりでなく、命を捨てても構わず絶対的忠義を要求することになったと言ってもよい。もしそうならば、絶対化的忠義の存在を認めなければならないのではあるまいか。

それだけでなく、平安中期の右大臣である藤原師輔(908-960)は子孫のために『九条殿遺誡』と称された日常生活上の心得を書き置いたが、その中の「若者の心得」では「君のため忠貞の心を尽し」<sup>21</sup>と子孫を戒めた。それから、以下の手紙から女房として中宮定子に仕えた清少納言の献身的な奉仕振りも読み取れた。

「いみじく思へるなる仲忠がおもてぶせなる事はいかで啓したるぞ。  
たゞこよひのうちに、よろづの事をすててまい(ゐ)れ。さらずはいみじう  
にくませ給はん」となん仰せ事あれば、よろしからんにてだにゆゝし。ま  
いていみじうとある文字には、命も身もさながらすててなん、とてまいり  
(ゐ)にき。<sup>22</sup>

次には、以下の四点から、阿漕の絶対的忠義を論証してみよう。

第一には、阿漕は自分の夫帯刀より一層落窪の君を大事にしたことである。平安貴族社会の女性が恋愛を生命としたことは既に竹野長次氏が指摘した通りである<sup>23</sup>。しかも、性生活の自由を大きく肯定しているのが貴族の道德観念の重要な特色であり、男女の結合こそ人倫最高の関係であり、これに優越するも

<sup>20</sup> 阪倉篤義校注『竹取物語 伊勢物語 大和物語』(日本古典文学大系 9), 岩波書店, 1957, p45

<sup>21</sup> 阿部猛『平安貴族の実像』, 東京堂, 1993, p154

<sup>22</sup> 渡辺実校注『枕草子』(新日本古典文学大系 25), 岩波書店, 1991, p101

<sup>23</sup> 竹野長次『文學より見たる平安朝文化』, 東京堂, 1941, p197

のは一切認められなかった<sup>24</sup>。また、源中納言の長男の越前守景純が、「景純も國を治めて、徳なきにしあらねど、妻をまつ思ふとて、母へはえ奉らず。今にてもえ奉るまじきは、子の心ざしの薄きぞかし。」(p. 218)と言ったのは、ほかでもなくそれらを実証したものであろう。にもかかわらず、阿漕は、落窪の君と道頼との結婚の初日に帯刀と口喧嘩をしたほど、落窪の君を守るために、夫婦関係の悪化をも構わなかったのである。その上、落窪の君のために、幾度帯刀を責めたこともあった。

第二には、阿漕は落窪の君のために豊富な安楽な生活を放棄したことである。

「昔の人の御かはりは、あはれに思ひ聞えて、女子も侍らねば、むすめにし奉らむ、身一つはいと安らかにうちかしづきて、すゑ奉らんと思ひて、さき<sup>25</sup>も御迎すれども、渡り給はぬこそ怨み聞ゆれ。…」(p. 69)

と叔母から阿漕への手紙である。わが娘のように何の不足なく大切にお世話すると可愛がってくれるはずの叔母の好意を拒み、今まで通りに継母に虐められている落窪の君から一步も離れずに奉仕している。言わば、阿漕の献身的な奉公が手紙から容易に推察されたのである。

第三には、阿漕は自分の認めた主君のために、今仕えている新しい主君を裏切ることでも決して辞さないことである。三の君の召使になって衣装や調度品等の好条件を与えられた阿漕は相変わらず健気に暇を見て従前通り忠実に落窪の君の面倒を見た。わけでも、落窪の君が幽閉された時に、北の方に放逐された阿漕は源中納言邸を出て行こうとしたのだが、主君を心配してならない原因で止め、「いともあさましく、知り侍らぬ事により」や「宮仕をしさし侍(る)める事と、いと悲しくなん。」や「今はあかれ異にて侍れば、この落窪の君の御事まほに知り侍らず。」(p. 100)などと言った如き、口上手に誓いも立てて新しい主君——三の君に頼み込んだ故に、続いて源中納言邸で奉公できたが、結局落窪の君を救出するために、彷徨いもなく決然と新しい主君——三の君を裏切った。正しく「忠臣は二君に仕えず」と言うことではなかろうか。

第四には、阿漕の長寿は何らかの意味を含めているに相違ないことである。長寿は古今を問わず大多数の人の希求する願いでははずだ。ラストシーンには「内侍のすけは二百まで生けるとなり」(p. 248)という文があるが、誇張しながら、二百歳の長寿を得たことは落窪の君に忠義を尽くした阿漕への超特大の

<sup>24</sup> 家永三郎『道徳思想史論』(家永三郎集第三巻), 岩波書店, 1999, pp209-210

褒賞であると考えられる。なぜなら忠義な阿漕は落窪の君の得た最高の幸福、おまけにその後代子孫の繁栄を余す所なく見届け尽くしたからである。それは主君に仕える侍女としての所詮最高の幸福ではないかと考えて間違いなさそうだ。それにこそ、阿漕の長寿の意味があるような気がする。それに起因して、最初から最後まで落窪の君に忠義を尽くした阿漕には長寿の必要性があると言っても過言ではない。

以上のことから、阿漕は確かに自分の主君——落窪の君に忠義を尽くしたが、その忠義は絶対的なものであったと考えられる。

## 5.2 阿漕の条件的忠義

阿漕の落窪の君への忠義が絶対的だということは既に述べてきた。と言っても、『竹取物語』の中の大伴みゆき大納言の従者達が「親君と申（す）とも、かくつきなきことを仰（せ）給ふことゝ、事ゆかぬ物ゆゑ、大納言をそしりあひたり。」<sup>25</sup>と言った通り、かかる絶対化の忠義はある特殊条件下、相対化の一面を持っているのである。即ち、盲目的な何の報いも期待していない忠義というわけではなく、事情の変化によって変えられた条件的な忠義である。

### 5.2.1 目的性のある忠義

阿漕が落窪の君に絶対的に忠義を尽くしたのは言うまでもないことであるが、一定の目的性が完全にはないわけではない。阿漕が明確に言わなかったにしても、「我等がためにも思ふやうにて」（p. 48）と彼女の夫帯刀の口を借り、落窪の君と道頼を助けるかたがた、自分たちにとっても好都合になるように言わせた。結局、阿漕と帯刀の想像以上かもしれないが、二人とも出世し、何人もの子供を持って愛情深く豊富で幸福な生活を過ごすようになった。阿漕は「内侍のすけ」となり、その夫帯刀は相次いで左衛門尉兼藏人、三河守、左少弁となった。「内侍のすけ」の地位について、的場雅美氏は「政権を執る特別の家柄でない限り、女官として望みうる最高の地位は典侍であったと言えるだろう。」と述べている<sup>26</sup>。また、『枕草子』の「女は」の段（176段）には「女は内侍のすけ。内侍。」<sup>27</sup>と第一に掲げられているくらい、当時の女房たちにとって最

<sup>25</sup> 阪倉、前掲書、p46

<sup>26</sup> 的場雅美「落窪物語『あこき』の幸せ——『典侍は二百まで生けるとや』を中心にして——」『滋賀大学国文学会 27号』、滋賀大学、1989、p26

<sup>27</sup> 池田亀鑑・岸上愼二・秋山虔校注『枕草子 紫式部日記』（日本古典文学大系 19）岩波書店、1958、p223



も憧れの地位だったことは確かであろう。というのは、阿漕にとって、「内侍のすけ」は自分の出世した最も理想的な至高な地位だったからだ。たとえ些かあったとしても、何らかの目的を持っていればこそ、忠義に条件を付け加えたのではないかと考えられる。

### 5.2.2 落窪の君に対抗的な態度を取った阿漕

阿漕は巻二の終わりから巻三へかけて、道頼の同志たる相手に相応しい女性に変貌し、復讐を実施した道頼の頼りになる助手となった。

道頼は「北(の)方をうち殺さばやと思ふ。」(p. 104)ほど北の方を憎んでいたし、また「われゆゑにかゝる目も見るぞと思ふに、いとゞあはれにて、いかでこれをぬすみ出でて後に、北(の)方に、心まどはすばかりにねたき目見せんとおもひ思ふ。」(p. 108)と言った如く、自責した道頼は落窪の君をどうしても幸福にしようと決意したと共に、何度も北の方への復讐の念が湧いてきたのである。道頼の復讐心がどれほど強烈であったかがもはや窺われてきた。それこそ、「我(が)身たゞ今人とひとしくてもがな、むくいせんと思ふも、胸はしる。」(p. 101)という阿漕の復讐心に合致するようになったと言い得よう。

さて、道頼による数々の復讐が、北の方からの虐待とほぼ対応していることは頻繁に指摘されている<sup>28</sup>。実は、「苦しき事、落窪の部屋に籠り給へりしにもまさるべし。」(p. 146)と書かれたように、物語には復讐——虐待の対応関係を示した文が何箇所もある。次は、3.2 に述べた落窪の君が受けた虐めに対応しながら、簡単に道頼による復讐を列挙しておきたい。ただし、虐めは(1)から(10)までだが、その中の(3)と(6)に対応する復讐がないようである。

(1)清水寺詣での時に車争いで壊された狭い牛車に閉じ込められた。

---

内侍のすけについては、「典侍。内侍司の次官。」と解釈しているが、内侍については、「掌侍。内侍司の第三官。」と解釈している。

<sup>28</sup>安藤華子「『落窪物語』論——再構築される継子関係——」『愛知淑徳大学国語国文 29号』, 愛知淑徳大学国文学会, 2006, pp1-10

五十嵐力「『源氏物語』の二大先駆」『新訂平安朝文学史 下巻』(『日本文学全史』巻四), 東京堂, 1955, pp1-83

神尾暢子「落窪物語の作品構成——道頼報復と統合論理——」『国語国文 58巻3号』, 中央図書出版社, 1989, pp1-22

小山利彦「『落窪物語』の構造——報復譚と出世譚を軸に——」『論集中古文学2 初期物語文学の意識』中古文学研究会, 笠間書院, 1979, pp239-261

高橋亨「〈話型〉継子譚の構造 実例『落窪物語』」『国文学 36巻10号』, 学燈社, 1991, pp48-54

(2)「面白の駒」という侮辱的な呼び名により、源中納言家特に四の君が心理的な苦痛を与えられ、恥を搔き、また少輔の後朝の文による大恥を受けた。

(4)源中納言邸に仕えていた美しいよい女房達が道頼邸に引き抜かれた。

(5)道頼との車争いの失敗で、賀茂祭見物を止めさせられた。

(7)道頼は清水寺参詣中の北の方達の参籠部屋を横取りし、源中納言家の改築した三条邸を奪還した。

(8)四の君の結婚の巻き添えにされて蔵人少将に離縁された三の君は独身のまま生涯を終えた。

(9)道頼が源中納言に細々と復讐の実情を釈明し、継母が孤立にされた。

(10)道頼は詐欺で痴れ者「面白の駒」と四の君を結ばせ、また賀茂祭の時に典薬助を従者に撃ち殺させた。

ここで、明らかにしたいのは、道頼はなぜ虐待に対応する復讐が実施できたのかということである。阿漕はまだ源中納言邸にいた時に、道頼の前で、北の方が落窪の君の所有物を奪ったことにより、北の方への不満を漏らしたこともある。なかんずく、「日比の事よく語れ。こゝには更にの給はず」(p. 124)と道頼に聞かれた時に、阿漕は「北(の)方の心をありのまゝ」(p. 124)に話した。そこからすると、阿漕の手伝いがあったからこそ、道頼は虐待に対応する復讐が実施できたと言ってもよからう。

ところが、復讐の事で、一心同体の阿漕と落窪の君との間に矛盾が起こってきたのである。例えば、「いと胸きたなかりける。我(が)人にはあらで、君の人になりね。それこそかく物はしふねく思ひいへ」(p. 167)と叱られると、「さは、衛門、わが君につかうまつらむ。衛門思ひし限りの事をせさせ給へば、實に御前よりも寶の君となん思ひ奉る」(p. 167)と阿漕が答えた。そうして見れば、阿漕はもはや落窪の君に忠義でなくなったように見える。しかし、事実はそうではないと思われる。

落窪の君は理想的女性像だと言われている。決して道頼の復讐を大いに応援するわけにはいかないことは想像すれば分かる。けれども、道頼の復讐心の強烈さが前に既に闡明されたし、「ほど／＼にしふねく、心ふかくなんおはしける。」(p. 108)と言ったように、道頼はたいへん復讐心が強く、思慮深い性質である。それ故に、落窪の君の哀願を構わずに、一心に徹底に復讐を実施し続けたのである。そういう状況下、道頼と落窪の君との順調な睦まじい夫婦関係に影響しないように、道頼の復讐を応援する役目は、落窪の君に忠義な阿漕に担当させるほかに仕方がないのではないかと思われる。おまけに、「たぐひなくにくし。」(p. 111)と北の方の下心が知れた落窪の君も北の方が無類に憎らし

いと思っているために、阿漕は主君の内心を察して道頼の復讐に加担したことは否定できないであろう。更に、落窪の君の幸福のために、右大臣から道頼への縁談の事を聞き次第直ちに主君に告げた。従って、阿漕は落窪の君に忠義でなくなったのではなく、事情の変化によってその忠義を別の形に変えたと考えられるだろう。すなわち、忠義に条件を付け加えられるということになったのである。

## 6 おわりに

日本の文学史上においては、『落窪物語』は継子虐め譚として現存最古の物語だとされている。物語中の副主人公と言える阿漕は侍女でありながら、主君——落窪の君のために、他の平安王朝物語に見られない大活躍をしたのである。しかも、この大活躍は自分の主君に忠義を尽くすという意味だったのである。そこで、本稿は阿漕の忠義侍女像について検討を試みた。

美貌なる阿漕は落窪の君の一心同体の姉妹のような存在として自らの機転で力強く落窪の君を度々助け、ピンチに陥った落窪の君を機敏な行動力で腕を振るって救助し、まさしく落窪の君の唯一の良き「後見」また援助者だと考えられる。とりわけ、阿漕は落窪の君と道頼との結婚に助力し、最大功績を立てたのである。言わば、阿漕は落窪の君に忠義を尽くしたと言える。しかも、阿漕の忠義の特質と言うと、絶対的忠義(誠に忠義を尽くす真心が変わらぬこと)と条件的忠義(事情の変化によって忠義の形を変えること)ということである。詳しく解釈すると、阿漕は絶対的に主君である落窪の君に忠義を尽くしたのだが、何らかの目的性を持っているために、その忠義に条件を付け加え、更に事情の変化によってその忠義を別の形に変えたこともある。

『落窪物語』の成立年代ははっきり分らないが、凡そ十世紀の終わり頃だと推察されたことにより、藤原氏の勢力の上昇期の摂関政治時代の作品だと判断し得る。また、ある時代の作品はその時代の社会世相更に思想を反映したはずであるがゆえに、阿漕の忠義侍女像の設定は平安貴族社会と何らかの関係を持っている可能性があり、今後の課題としてさらに考察を行いたいと考える。

## 【付記】

本研究は黒龍江大学の研究成果であり、中国国家留学基金の援助を受けています。また、本研究は黒龍江省経済社会発展重点研究課題(外国語学科専門項目)重点項目『日本古代後期文学における儒家孝文化の受容研究』(18YJA752020)に関連した研究です。